

杏林大学 地（知）の拠点整備事業
平成26年度事業に係る第三者評価報告書

I. はじめに

杏林大学は文部科学省が取り組む「地（知）の拠点整備事業」に平成25年度に採択され、補助事業を実施してまいりました。

初年度より、東京都三鷹市、八王子市、羽村市との連携に基づき、包括的な地域連携を推進する「杏林CCRC：Center for Comprehensive Regional Collaboration」を構築するための杏林CCRC研究所を新設し、地域と本学関係者とのインフォーマルなコミュニケーションの場となる杏林 commons の検討、教育の地域志向化に向けた環境整備や構築など、様々な取り組みを展開しております。

2年目にあたる平成26年度にはこれらの連携三市をフィールドとして本学が持つ多様な教育資源を活用し、地域との連携を深めながら、杏林大学の更なる地域における知の拠点として発展するよう努めてまいりました。行政と連携し地域の問題を学びながら、課題発見していく科目を新設し、学生教育に反映することを実現しました。

このたびの第三者評価委員会では、杏林CCRC研究所紀要、事業成果報告書などを基礎資料とし、学外の3名の有識者による事業成果の点検・評価、助言をいただきました。私共の質疑を経て極めて有用なご指摘をいただいたことを心より感謝申し上げます。これをもとに、学生の地域志向人材育成、課題解決に資する様々な人材や情報・技術が集まる、地域コミュニティの中核的存在として大学の機能強化を図ることを推進していく所存です。

平成27年10月27日

杏林大学地（知）の拠点整備事業
事業申請者 杏林大学 学長 跡見 裕

II. 第三者評価委員会の開催概要

1. 日 時 平成27年9月1日（火）14：00～16：00
2. 場 所 杏林大学三鷹キャンパス 11階 貴賓室
3. 第三者評価委員（敬称略）
井藤英喜先生（東京都健康長寿医療センター理事長）
関谷 博先生（羽村市社会福祉協議会顧問）
中村秀一先生（一般社団法人医療介護福祉政策研究フォーラム理事長）

4. 評価根拠資料

- ①地（知）の拠点整備事業申請書
- ②平成26年度大学改革推進等補助金調書
- ③平成26年度実績報告書
- ④平成26年度事業成果報告書
- ⑤杏林CCRC研究所紀要
- ⑥杏林医学会雑誌「杏林大学と地域医療」

Ⅲ. 第三者評価報告書

平成26年度事業報告をもとに、第三者評価委員から以下のように事業成果に対する評価、意見、助言を受けた。

1. 総括的評価

平成26年度は、平成25年度に引き続き、教育、研究、社会貢献のそれぞれの分野で活発に事業、各種の取り組みが行われ高く評価できる。杏林大学は、次年度八王子キャンパスにある保健学部・総合政策学部・外国語学部・大学院の三鷹キャンパスへの移転が予定されているが、そのことが今後の本事業の推進に悪影響を与えないように十分に配慮し、次年度もこれまで同様活発な活動を維持していただきたい。

本年度も昨年同様、いかに市民にCOC（Center of Community）事業を知ってもらえるかが継続した課題となっており、解決したとは言い難い。同時にCCRC（Center for Comprehensive Regional Collaboration）活動を展開しながら、各学部の中にCCRC事業の伝統が残るように本事業の継続のための責任体制を明確にするとともに、各事業の効果を評価・改善し、より効果的な事業とするための数値に基づくPDCAサイクルを構築すべきである。COC事業を、杏林大学のバックボーンとなるような体制作りの出発点としてほしい。次年度は補助金終了後も諸活動が継続できるよう着地点を見極めていく時期にあたると思われる。あれをやったこれをやっただけで事業が終わるといことにならないようにすべきである。その意味で、行政や地域で抱えている問題についての、自治体向けの定期的な相談体制の整備は、こうした事業を大学に根付かせるひとつの策になるので検討してほしい。

2. [教育] 地域に対する意識向上のための科目（地域志向科目）の設定と運営実績

学生による問題点の発掘と、その解決策の提案というプロセスを経ないといけないだろう。常に課題や問題点が提示されていて、ただ解決すればいいだけの問題ではないはずである。学生の問題解決力を鍛えるためには調査を含めて、地域の方と交流する中からどのようにして問題点をキャッチするのかを勉強させないと実用的ではない。模擬的に地域に

出て行く際に何かひとつ調査をさせて問題点を発掘させるなどの過程を踏んで問題解決を進めていくことを経験させることが肝要と思われる。

医学部保健学部では、将来的に地域連携が欠かせない分野なので身近な問題として取りかかることができるだろうが、文系の学生に対してはなぜ地域なのか、将来やるであろう職業との関係で考えさせるなど、将来の方向性を含めて地域交流に関するモチベーションを上げていくことが肝要だろう。最近の学生は身近な両親、身近な人が地域でどのように暮らし、地域にどのような問題があると考えているのかという点に関心を持っている人が多い。それ故、親族が住んでいる地域の問題を取り上げ、考えるきっかけにするのもモチベーションをあげるためのアイデアのひとつであると思う。

羽村市、三鷹市、八王子市で展開する事業を介して学生たちが地域と交流するというものの経験を積んでいることは素晴らしい。大学が持つ知識、学生・教員の発想・行動力が地域の活性化にいかされることを経験することで、大学の価値を実感できる事業となっていると思う。「地域と大学」の授業で市職員が講義を受け持つ取り組みによりプレゼン能力のアップにもつながっていると思う。今後は実際に地域からの学びを開始した学生達の学年が上がっていく過程の中で、より深いレベルで地域への取り組みに参加していくことができる仕組みを構築されることが望ましい。

3. [研究] 地域を志向した研究体制の構築促進と実績

公開講演会は学外への働きかけとして有効であったと考えられるうえ、杏林CCRC研究所セミナーを10回開催するなど、活発な活動がおこなわれていた。また、紀要に掲載されている冒頭5論文は少子高齢社会というわが国が直面する課題を扱い研究成果をあげている。

アカデミアのスタンスとして地域の問題をどう発掘するのか。研究とも関わってくることだと思うがその点をどうされるのか、事業の効果判定をどのようにされるのかが見えてこないところがある。効果判定を行うために行政が実施する調査に大学が協力するなどのことがあってもよいので検討してほしい。本事業を通して、各自治体の医療政策や保健政策、各自治体が抱えている地域の問題の解決をサポートするといったことも杏林大学の一つの役割であるということが、大学にも自治体にも自然に受け入れられるようになるように努力してほしい。

国外での研究調査、他大学訪問などを行っているが、本事業との関係で、研究成果をどのように整理し、どのように活かされようとしているのか読み取れなかった部分があった。

4. 「社会貢献」杏林CCRCに即した社会貢献活動の促進と実績

「健康寿命延伸」等3分野で14本の社会貢献活動が実施されており、事業としては着実に前進している。そうした社会貢献活動によりどのように地域が活性化したのかなど効果をどのように判定し、さらなる改善を図るかという部分は今後の課題となるだろう。計量的判断は難しいと思うが、病院と地域、大学教育と地域を結ぶ視点を取り入れてみてはどうだろう。実際に活動に参加した地域の方々から声を聞くと、例えば大学教員から直接細かな指導が受けられる、学生と地域の商店主が議論できる場があることで若者の視点からの提案がされるなど好評である。短期的なものではなく長期的な視点に立った取り組みをしていただきたい。またキャンパス移転がどの程度影響するかは分からないが、現状を維持して活動していただきたい。市民への賦活活動は継続して行っていく必要がある。

生きがいきづくりコーディネーターについて受講者が少ないのは何が悪いのか、広報の仕方やプログラムの問題なのか分析が必要なのではないか。移転によってロケーションの課題は解消されると思うが、井の頭キャンパスへの移転を契機に改めて考察し、内容と開講時間のバランスを検討してみる必要がある。病院でのボランティアを専門職の知識にとらわれない幅広い見識を持った生きがいきづくりコーディネーター課程修了者に任せてもいいのではないか。病院と各機関を結ぶコーディネーターとして患者目線で対応できる。その他、生きがいになるような役割、例えば防災リーダー、教育ボランティア等の資格を与えるということも今後の検討課題になるだろう。

生きがいきづくりコーディネーターの受講が修了したことがメリットとなるような体制が構築されることが望ましい。また、地域で生きがいきづくりコーディネーターをどのように活用していくのかを考えることも必要である。

情報発信のためにHPの多言語での作成は、地域や大学の国際化に対応するという意味ではこれからの大事な仕事となる。外国語学部は、このような仕事も分担し、外国語学部のあることの価値を高めていくことが必要であると思う。